

声に出して読んでもらいたい 対談シリーズ

変わる日本の教育

子どもがこれからの 時代を生き抜くために 必要な力とは

クセジュ創業者

教育研究所ARCS所長

クセジュ代表



管野 淳一



鈴木 久夫



司会

新松戸教室長



佐々木 多門

- 第一部
教育改革の背景にあるもの
- 第二部
学校の現状と苦悩
- 第三部
クセジュの理念の根幹とは
- 第四部
親世代の方々へ

大学入試の主な変更点

- ◇ 現行のセンター試験を廃止し、当面は「①大学入学共通テスト」と「②大学独自問題」の結果を合わせて合否を判断。①のテストは、従来のセンター試験よりも幅広い知識や思考力が問われ、記述問題も導入される。
- ◇ 最難関大学(旧帝大+早慶レベル)では、①のテストに加え、さらに難しい②のテストが課され、主体性や協調性までもが試されるものとなる(国際バカロレアが参考にされている)。
- ◇ 難関大学(地方国立大+首都圏難関私立レベル)では、①のテストの結果を重視しつつ②のテストも課す。
- ◇ 中堅大学は①のテスト結果を重視する可能性大。

国際バカロレアとは ※文部科学省HPより

国際バカロレア機構(本部ジュネーブ)が提供する国際的な教育プログラム。国際バカロレア(IB:International Baccalaureate)は、1968年、チャレンジに満ちた総合的な教育プログラムとして、世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、生徒に対し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせるとともに、国際的に通用する大学入学資格(国際バカロレア資格)を与え、大学進学へのルートを確保することを目的として設置。現在、認定校に対する共通カリキュラムの作成や、世界共通の国際バカロレア試験、国際バカロレア資格の授与等を実施。

教育改革の背景にあるもの

—「2020年から大学入試が変わる」という話を耳にしますが、具体的にどう変わるのかわからない人も多いと思います。実際どうなるのでしょうか。

管野 まずセンター試験の廃止に伴って、“大学入学共通テスト”と“基礎学力テスト”というものが導入される予定ですが、後者のテストは少なくとも2022年までは活用しない方針のようですね。つまり実質的には、しばらく“大学入学共通テスト”と“大学独自の入試問題”をあわせて判断することになる

でしょう。ただし、今度の入試改革のポイントは入試



システムの改革というよりはむしろ「入試で問われる問題の質の変化」です。

— 出題傾向や難易度が変わることでしょうか？

管野 従来の知識偏重型の入試問題から、記述力や主体性、さらには協調性までも問うようになるということです。特に難関大学ではその傾向は強くなっていますし、最難関大学では明らかに国際社会で勝負できる人材を欲していることがわかりますね。

鈴木 すでに変化の兆しは現れていて、大学入試だけでなく高校入試においても「覚えていれば解ける問題」だけではなく「覚えた知識を組み合わせる問題」や「自分自身の考えを記述させるような問題」が徐々に増えています。

— そもそも、なぜ入試問題や入試システムを変える必要があるのですか？

管野 これは圧倒的に社会、具体的に言うと国際競争力の欠如を肌でひしひしと感じている財界からの要請が大きいですね。産業構造の変化により、必要とされる人材が変わったからです。これまでの規格大量生産型の社会において必要とされた人材は「言われたことを正確、かつ迅速に処理できる人物」でしたが、これからの国際競争の中で求められているのはそのような人物ではありません。

鈴木 これまでは上から与えられた課題を言われた通りにこなすという“真面目さ”がそのまま社会の戦力につながっていて、会社もそういった人材を重宝しましたよね。また、そのような人材を獲得するためのフィルターとして大学入試は非常にマッチしていたと思いますが、その図式が崩れつつあるということでしょうか？

管野 まさにその通りで、これまでは良い大学に入学し、社会に出れば「年功序列」「終身雇用」「十分な福利厚生」という言わば安定した生活を享受できるという期待感があつたじゃないですか。ところが今、会社が社員を一生面倒見る余裕がなくなってしまった。会社も生き残るために本気で人を選ばなければならないというわけです。

鈴木 だから管野先生は、これからの若者には「新しいものを生み出す創造力」「誰も気づいていない事柄に目を向ける問題発見能力」こそが必要だと、33年前のクセジュ開校当時からずっと発信し続けてきたわけですね。

管野 まさに、その通り！（照笑）

—ところが大卒の人たちを見渡すと、現実問題としてそのような人物が少ない。だから国はその前段階である大学入試の中身を変更することで、そのような力のある人物を選別できるようにしたい。あるいは力のある人物が育つ教育環境にしていきたい、ということ

しょうか？

管野 そうということです。ただし、一方でこれまでの教育及び受験システムも実は上手く機能した部分もあったことは断っておきたいところです。そもそも戦後これだけの短期間に日本を成長させたのは他でもない旧来型の入試システムです。特に国民全体に対する“学力の底上げ”を果たし、平均値で見ればかなり粒がそろった人材を確保することができたわけですから。

鈴木 確かに採用する側に



ととも「偏差値の高い大学出身＝課題解決のために努力できる」という解りやすい相関があったから、大学名をそのまま名刺代わりと考えて採用してきましたよね。

―皆が平等に頑張りやすい仕組みだったと。

このあたりはアメリカやヨーロッパの方法と違うところですね。

管野 その通りです。この平均値を上げるといふ日本旧来のシステムが、世界的に見て稀有な国民性を生み出していた要因の一つでした。アメリカ型の教育システムでは、数少ない突出した才能を見出すことはできますが、一方で字も書けない人物を生み出す危険性ははらんでいます。ヨーロッパも結果的に階級の影響を受けざるを得なかった。その点、日本の入試制度はある意味万人にとって公平だったと言えます。

鈴木 このような「努力さえすれば誰でも一定のステータスを得られる教育システム」が、文化やモラルの高さつまり稀有な国民性を生み出す一因になっている、ということですね。

管野 だから今回の大学入試制度改革が、安易にアメリカ型・ヨーロッパ型に振れるものだとしたら危機感を持ちますね。日本人の体質に合っていない制度ですから。

鈴木 いずれにせよ、少なくとも上位大学になればなるほど幅広い学力を問われるような入試傾向になることは濃厚でしょう。

学校の現状と苦悩

―大学入試が変わるとなれば、遡って高校教育、さらには中学校・小学校での教育も変化せざるを得ないと思いますが、現状はどうでしょうか？

管野 今、「アクティブラーニング(以下AL)」という生徒の主体性を引き出す授業が求められているでしょ。これは先ほどから話題に挙がっている通り、言われたことを機械的にこなす人物ではなく“能動的に自ら考える人物”を育てる一環としての取り組みなんですけど、実際多くの先生が何をやってよいか迷っているんですよ。私のところにも公立私立問わず相談が来るぐらいですから(笑)。

鈴木 この取り組みについて小中学生の生徒から色々様子を聞いたりして客観視してみると、結構かみ合っていないかったりするんですよ。

― どういうことですか？

鈴木 先生側に見れば「ディベートや調べ学習を取り入れなければならない」という思いから、どうしても形から入ってしまうんです。で、肝心の生徒に感想を聞いてみると「何か新しくやるが増えた」という認識で。つまり、「何をやるのか」ということにフォーカスしてしまうあまり、肝心の「主体性を引き出す」「能動的にさせる」という本来の目的が置き去りになっている感じがしますね。

― 確かに形式だけなぞって、肝心の学習内容

についての興味を生徒に持たせるような仕掛けがないと、結果ALとは言えませんね。

菅野 これはですね、生徒の年齢層によってやりやすさが変わったりするんですよ。私、教育委員会に委託されて柏市の某公立小学校を何度か視察したでしょ。驚いたのは先生が結構うまく生徒の興味関心を引き出していて、確かに生徒が能動的に授業に参加していたんです。小学生ぐらいだとまだ純粹だし、何か間違っても周りも別にバカにしたりせずどんどん発言できるんでしょうね。

— このAL授業って難しいですね。例えば今の話のように積極的に発言している子がいると一見活発な授業風景に見えますけど、実は特定の子が発言しているだけで、一部の子は全く参加してないということも往々にしてあるじゃないですか。

景に見えますけど、実は特定の子が発言しているだけで、一部の子は全く参加してないということも往々にしてあるじゃないですか。



クセジュ オリジナルALノート

鈴木 いやあよくあります実際。ただしその逆もまたあって、ほとんど発言しないけれど記述させてみたらものすごく深く考えていたり、素晴らしい発想をしているなんて場合もあるんですよ。先生がそのあたりを表面的にだけ見ているのは、「総合的学習」のときと同じ失敗を繰り返してしまいます。

菅野 だからね、本当の意味で先生の力量が問われるというか、力の差がものすごく出ちゃう。ALで重要なのは、「何をやるか」ではなく、「どうやるか」だということですよ。一言で言えば「生徒に興味関心を持たせること」「知らないことを原動力に知への欲求をかきたてること」これができればよいのです。

— かなり高度な技術が先生側に要求されますね。

菅野 でも悲観材料だけというわけではありませ



中学部授業風景

せんよ。私は某私立高校へのアドバイスもしていますが、特に若い先生は柔軟です。今は色々なツールやIT機器が発達しているので彼らはそれらを駆使して抵抗感なく授業を工夫しています。先日は定期テストの問題にAI的なものを取り入れたらどうかと提案したんです。そうしたら授業自体もそういう方向性にならざるを得ませんからね。恐らくそれを踏まえてまた考えてくれているとは思いますが。

クセジュの理念の根幹とは

— ところで、国が今まさに舵を切ろうとしている教育や入試制度の方向性は、クセジュが開校当初から掲げてきた理念と合致していますよね。

菅野 これが驚いたことに、公立私立問わず学校の先生方がクセジュの教育方針をよくご存知なんですよ。塾を離れ研究所という立場で活動して、改めてこれまでどのように見られてきたか分かりました。真面目にやってきて良かった(笑)。

鈴木 私は大学生の頃にアルバイトとしてクセジュに入社して理念に感銘を受け、今代表を受け継がせてもらいましたが、30年以上も前の時点で“生徒の知的好奇心を引き出す”ことや“主体性を引き出す”という視点は珍しかったですよ。

菅野 塾と言えは「受験のために行く詰め込みの場」というのが世間の認識だったじゃないですか、まあ今もそうかもしれないですが。

でも自分が興味関心を持たないと知識も身につかないと思っていたので、学校の補完ではなく目先の入試テクニックでもなく、来た生徒に勉強の本当の面白さを教えたいと思って始めたんです。

— **だから目先の点数を追わない、というスローガンを掲げた。**

管野 入試や目先の点数がどうでもいいということではなくて、本当に点数をとりたかったら本当の勉強をしようよってことね。だから例えば国語では森鷗外の「舞姫」をただ読ませるのではなく朗読テープを聞かせて、その時代背景や裏話を語るわけです。生徒は雑談だと思いかもしれないけれど、だんだん興味が湧いてきて自分でも調べようという気になる。そういう勉強が結局は入試にも役立つんだっていうことを再三言ってきたわけです。

鈴木 面白かったのが、私が最初に研修を受けていたときに見学した授業が世界史かと思ったら実は数学だったという。古代の建築様式と相似について先生が語っていて、当時は意表を突かれましたが、今はその意図がよくわかります。

管野 欧米のエリート教育では当たり前のことですが、世界史・哲学の知識は不可欠で、そういう起源とか背景知識から入っていかないと話になりません。本来人間は知的好奇心があって、だからこそ文明が栄えたわけで、試験があるからなんでも満遍なく覚えろという今の教育では、知的好奇心を潰してしまいます。

鈴木 そういう“興味を持って取り組む”ことによって身につく知識や理解は、義務によるものでは到達できないレベルになりますよね。私なんか幼少の頃から飛行機が大好きで、エンジン音を聞いただけで機種がわかります（笑）。

管野 仮にトータルとしての成績がパツとしなくても、子どもたちには必ず何かしら得意または好きな分野があるでしょう。そこにおける取り組みは苦手な科目にも必ず応用できるというのが我々の考えの根幹にあります。

— **クセジュ小学部で今実施している個性発掘プログラム(HP参照)も、そういう取り組みの一環ですよ。**

鈴木 その通りです。同時に、今後の社会に必要な「創造力・問題発見能力に長けた人物」を育てる狙いもあります。

管野 といっても、似たような取り組みは開校当初からずっと



やってきました。要するに私たちが取り組んできたことに、ようやく入試や教育制度が追い付いてきたということですよ。

親世代の方々へ

— **学校教育が変化しようとしているからこそ、教育に対する家庭の価値観というものがより一層重要になってくる気がしますが。**

管野 そうです。親自身が古い価値観の教育を受けた世代だからこそ、きちんと考える必要はあると思いますよ。例えば子どもが好きな科目だけ黙々とやっているとするじゃないですか。そうすると大抵の親は「そればかりやってちゃダメ！」って言うでしょ。

鈴木 親目線になると、どうしても万遍なく全教科で好成绩をとってほしいと思ってしまいうんですよね。

管野 子どもそれぞれに特性があるし、終身雇用・年功序列が途切れたこれからの社会では自分の“得意技”を持っている人の方がたく

ましく生きていけます。だから才能をできるだけ伸ばしておくのが大事。会社を作るでも他と提携するでも、それぞれ得意な分野を持ち寄ってチームを作ることが普通になってきていますからね。

鈴木 よく私も生徒に言っています。社会に出てからの一番長い40年間でどれだけ輝けるかが重要だから、そのために自分の幅を広げなさいと。

管野 さらに言うと、今の時代は皆長生きだから退職してからもまた長い。人生が二度あるようなものと考えれば、やはりちゃんと自分なりに才能を伸ばして実力をつけてきた人の方が面白く生きられると思います。とにかく社会に出てからも伸びる人が最強なわけですから、学生の段階で体裁を整えるための勉強ばかりさせて、子どもの伸びしろを狭くしないようにして欲しいですね。

鈴木 「内申が何点足りない」とか「資格を取っておいた方が有利」という目先の視点でなく、もっと大きな視点で子どもの特性を見極めてあげることの方が重要ということですね。

管野 そうです。そしてそれを親に説くと、「でも現実問題としては…」と必ず言われますが、20年後30年後に本当の意味で現実問題に直面することになる。それと、そもそもその資格云々だって危険な発想ですよ。例えば一般的にステータスがあると言われる医者や弁護士という仕事だって、自分が倒れたら終わりじゃないですか。有利不利という話で言うなら、これは“資格を持っている人を雇う”側に回るのが圧倒的に有利なわけですよ。まあこのあたりの話は長くなるから、詳しくは教育研究所ARCSの私のブログ(arcs-edu.com)を見ていただくということで(笑)。いずれにせよ、これからはいい意味での格差が生まれるでしょう。だから今言ったように、古い価値観に縛られて目先の利益を追うような生き方をすると一番割を食うかな、と思います。

— 大学入試改革の話に戻すと、従来のように出身大学が就職時の名刺代わりになる状況ではなくなってきています。そのことも念頭に置いて親も考えていかなければなりませんね。

管野 ただし第一部でもお話した通り、最難関大学の一部だけは大学独自の問題によって国際社会で勝負できる人材を確保するという構図になっています。つまりその他の大学出身である場合、簡単に解雇される可能性があるということです。

鈴木 そうならないためにも個人としての才能を伸ばし、「得意分野で社会貢献できるぞ」という状態にしておかなければなりませんね。

管野 そうです。そしてそのためには自分には何ができるか、つまり自分というものを深く知っておく必要があるのです。親もそれを見出してあげる視点が必要なのは言うまでもありません。

— よくわかりました。本日はありがとうございました。

